

「生麦事件」から見た 19 世紀の世界と地域

第二発表者 酒井晴雄

□はじめに (本日のテーマ)

- ◎生麦事件については、今後も新資料が発見されて研究は継続されていくのですが、それによって事実関係や事件の評価が大きく変えられる可能性は少ないでしょう。
それでは、今なぜ生麦事件を取り上げるのか？
- ◎新型コロナの感染拡大は、「日本も世界の一部」であるという当たり前のことを改めて気づかせてくれました。世界のなかでの日本、世界史の流れのなかで生麦事件を見た時、そこに何が見えてくるのか—それを考えるのはコロナ禍の体験を踏まえた今の時期をおいてないと思ったからです。

1. 生麦事件の概要

文久 2(1862)年 8 月午後、東海道生麦村付近で薩摩藩島津久光の行列を乱した英国人 4 名を従士が殺傷。翌年 5 月幕府は賠償金を支払って事件を収束させたが、薩摩藩は英国の要求を拒否して 7 月に薩英戦争を始め、漸く 11 月に賠償金を支払って講和し、以後英国と急接近。

(1)偶然の出会いが生んだ悲劇

- ①事件当日は西暦 1862 年 9 月 14 日(日)。英国人 4 名はピクニック気分で、馬上からの景色を楽しみながら川崎大師へ向かう。来日後間もないリチャードソンとボロデール夫人が前、日本在住のクラークとマーシャルが後ろの馬に。(もし順番が逆であったなら…)
 - ②幕政改革はある程度成功したが、自身については無位無官のままに終わった久光。凱旋気分と失意の入り混じった主人の心情は藩士にも微妙に影響し、緊張感を漂わせながら京都に向かう一行 400 名。先導組は慣例通り「脇に寄れ！」と叫ぶが、英国人は騎乗のまま行列脇を前進。先刻遭遇した米国人は下馬して敬意を表すが、礼儀をわきまえない英国人一行に「ナンダ素町人や女が馬に乗って…」と藩士の我慢も限界に。(米国人と遭遇していなければ…嗚呼、重なる不運！)
 - ③街道一杯に広がる本隊の圧力で道端に押し込まれながら行列脇を進む 4 名も、ついに行列責任者の制止で馬首を廻らせるが、先行の 2 頭は誤って久光の駕籠に接近。従士らは一斉に英国人を襲撃。リチャードソンは死亡、重傷のマーシャルとクラークは本覚寺(米領事館)に逃げ込み一命をとりとめ、ボロデール夫人は居留地に奔走して事件を報告。
- (2)初めての一般人殺傷事件で、居留地は衝撃を受ける。即座に捜査隊が組織され、リチャードソンの遺体回収に向かい、マーシャルやクラークも居留地に搬送される。
- (3)薩摩藩・幕府の対応
- ①神奈川奉行所 老中に逐次報告 久光側に犯人探索・保土ヶ谷宿滞在を要請
 - ②久光一行 保土ヶ谷宿に直行し、宿場警備・情報収集・江戸藩邸との連絡に努め、翌朝早々に出発
 - ③三田薩摩藩邸 幕府に「足軽岡野新助の仕業で行方知れず」と虚偽報告

2. 生麦事件の被害者と加害者

(1)被害者 後遺症で短命 男性は横浜外人墓地に埋葬

- ①マーシャル(享年 46 歳) 義妹ボロデール夫人を遠乗り誘う 絹輸出商 居留地社交界の中心 明治 5 年鉄道開業記念祝賀会で外国人代表として祝辞
- ②クラーク(享年 33 歳) マーシャルのピリヤード仲間 生糸検査員 上海で同郷リチャードソンと出会う 事件後遺症で生涯左腕は上がらなくなるが居留地消防士として活躍
- ③マーガレット・ボロデール(享年 36 歳) 香港貿易商の妻 マーシャルの義妹 事件 2 か月前に姉を訪ねて来浜 乗馬好き 事件後香港に戻り、8 年後難産と神経症のため死去
- ④リチャードソン(享年 29 歳) 上海で事業成功 帰国前に来浜し、クラークと再会
* 帰国船が遅れ遠乗りに参加 二度斬られ、落馬したところで止めを刺されて絶命
* 「雇った苦力に暴行」「違法商売」「粗暴」「英国の屑」「死は自業自得」と評判は散々だが、残された自筆書簡からは日本への愛着・父親を気遣う親思いの息子という意外な素顔も

(2)加害者 勅使護衛に選ばれた有能な藩士

- ①奈良原喜左衛門 薬丸自顕流の達人らしからぬ衝動的行動 伏見藩邸で病死？(享年 35 歳)
- ②久木村利休 20 歳で初の人斬り 後に陸軍中佐 晩年多くを語るが…？(享年 95 歳)
- ③海江田信義 リチャードソンに止め 子爵、奈良県知事、京都府知事歴任(享年 75 歳)

3. 生麦事件の原因と背景

(1)残された資料や逸話から、「攘夷」の風潮を事件の原因とするのは？

- ①藩士 400 名中で斬りかかった者は 5・6 名 事件直後、捜索隊は行列脇を支障なく通過
 - ②ヘボンやシュリーマン（考古学者）等、来日外国人が大名行列を見物してもトラブルなし
 - ③庶民 外国人は好奇心・商魂の対象 開放性・物怖じしない逞しさをもって接触
- (2)行列を乱した者に対して、従士が「無礼討ち」の特権を行使したことが原因とするのは？
- ①江戸時代の日本も法治国家で、白昼の公道における殺傷事件は犯罪
 - 『公事方御定書』（第 71 条）無礼討ちの制限 上司へ届出・事実の証明・止めの禁止
 - 『安政五カ国条約』治外法権規定 欧米人の犯罪は各国の領事裁判所で裁判
 - ②江戸時代の武士は「四民の鑑」とされ、為政者としての道徳性が求められている
 - 軽々に怒らず、慈しみ、剣技を磨く 「我慢の限界」となったら一刀で斬り捨て、相手に苦痛を与えない（失敗は、剣技未熟＝士道不覚悟で切腹）
 - 藩士が激昂して咄嗟の行動にでたことで起きた偶発的な事件と考えられる
- (3)被害者の「自業自得」だとする考えもあるが？
- ①米国人文地理学者シドモア 「無鉄砲なブリトン人が行列を侮辱したから」（『日本紀行』）
 - ②北京駐英公使ブルース 「同国人には温和だがアジア人には暴慢になる欧米人は珍しくない」
 - ③異郷の地で成功するのはどのような人間か？一攫千金の野心 若くして自力で財を築いた自信 大英帝国臣民の自負 →リチャードソンの人間は居留地民のなかに多数いる
- (4)異文化の出会いと数々の不運が重なって起きた偶発的な事件
- ①居留地民の生活 本国の生活や文化を持ち込み、周囲に同化を求める
 - 安政 5（1858）日米修好通商条約締結 居留地設置（英・仏・露・蘭も）
 - 第 7 条「十里遊歩規定」（移動制限）⇔遊歩道・公園・競馬場等設置要求
 - 文久 2（1862）神奈川奉行、横浜新田（中華街付近）に競馬用の柵設置
 - ②英国人の「常識」は日本人の「非常識」 居留地民を見る日本人の目は如何に
 - 19 世紀の英国社会 工業化・民主化進展 貴族制度維持
 - *乗馬・馬車所有 貴族の特権→上層市民に普及
 - *日曜日 安息日（教会で礼拝後、家で静かに過ごす）→休日（皆で野外活動を楽しむ）
 - 居留地民の夢 主に中下層民出身の居留地民 「ヨーロッパの淳」（英公使オールコック）
 - *財産を貯え、憧れの上層市民や貴族の生活を楽しむ ex 馬で自由に移動
 - 日本人の目にどう映るのか
 - *乗馬は武士の特権なのに、素町人や女でも乗るとは…
 - *休日は盆と正月、職業毎に違う 居留地では日曜日には皆で野外レクを楽しむ

4. 19 世紀の世界と日本

- (1)日本に有利な国際環境…近代的軍事力を持たず混乱が続く日本が植民地化の危機回避した一因
- ①英国の政策転換
 - 1850 年代圧倒的生産力・海軍力を所有 植民地獲得で激しい抵抗→植民地不要論・自由貿易へ
 - 1870 年代不況・他の工業国台頭 植民地の重要性を再認識し、帝国主義政策（植民地獲得）へ
 - ②「外圧の谷間」（1860～70 年代）
 - 仏（植民地争奪戦で英に敗北）米（南北戦争）露（クリミア戦争）
 - 各国は反乱鎮圧・国内外の戦争に兵力を動員し、日本に武力介入する余裕なし
- (2)薩摩藩の特異な位置…唯一の植民地所有藩＝軍事力・外交感覚・現実主義で転換期の政局をリード
- ①最南端の雄藩 古代からの名門島津家 名君出現（8 代重豪・11 代斉彬）将軍家・近衛家と縁戚
 - ②琉球王国 1609 島津氏が征服
 - 琉球貿易 藩の重要財源（海産物の密貿易、黒砂糖専売） 海外情勢・技術・学問に接触
 - 欧米船の接近 1820 年代～外国に対する警戒心
 - *外交とは「毅然とした主張をしつつ交渉し、相手との調整のうえでウィンウィンの結果を作るプロセス」（元外交官 田中均） 幕末にこの外交スキルを持っていた藩は他にあったか？
 - ③集成館事業 1850 年代島津斉彬が設置した洋式工場群（兵器産業中心）
 - ④「国父」島津久光の思惑と行動
 - 無位無官の陪臣「島津三郎」 11 代藩主斉彬弟、12 代藩主忠義父
 - *文久改革（公武合体・雄藩連合）勅使大原重徳の護衛 勅令で改革推進→幕政参画を図る
 - *松平慶永の拒否、朝廷工作の失敗 家督相続（藩主忠義と交代）・官位獲得の願いは挫折

○開港後の貿易ルートの変化への対応

* 藩財源 唐物の密輸入 蝦夷地海産物の密輸出 奄美黒砂糖の独占交易

* 横浜・長崎・箱館開港 欧米商人、東アジア中継貿易（昆布・香木・砂糖）開始

→横浜密貿易に積極的に参加

5. 生麦事件への対応

- (1)強気な薩摩藩 「生麦事件届書」(8月22日)「足軽岡野新助が…殺傷し、行方不明」と虚偽の報告
→有能な藩士を守る 幕府が「岡野某」を認めれば対英交渉に利用できる
- (2)困惑する幕府 権力の真空状態で挙国一致体制とれず→事実把握するが薩摩を追求せず
 - ①改革後の新政権 幕閣「橋・越二公のご英断に」(渋沢栄一) 慶永は側近と改革推進・報復人事
 - ②事件の対応 英国・薩摩の問題として関わり回避 失態の自覚(事前告知せず)
 - ③ニール英代理公使 自軍の戦力不足認識し、逆に幕府に強く出る

6. 生麦事件の収束

- (1)事件直後の居留地(住民会議)
 - ①強硬論 即時報復(久光追撃、重臣逮捕) 横浜領事ヴァイス大尉支持(多数派)
 - ②慎重論 全面戦争回避(戦力不足 英政府の承認・外交交渉で責任追及) ニール(少数派)
☆居留地の<空気>に流されないニールの冷静な判断は事件の余波を最小限に抑えた
- (2)事件直後の久光一行
 - ①幕府の薩摩不信 「文久改革」への不満→事件の責任押し付け(久光追討の声も)
 - ②久光側近(小松帯刀、大久保利通) 居留地襲撃計画中止 宿場警備、情報収集、江戸藩邸と連絡
☆若い藩士の<空気>に流されずに冷静な対応をしたことで横浜近郊の危機を回避
- (3)神奈川奉行所の動き…権威を恐れず、幕吏としての職責を全う
 - ①神奈川奉行阿部正外
○久光一行に出発延期要請 小田原藩に箱根閉鎖・久光西上阻止を命令
○英国に「大名については非通知…島津三郎は無位無官、薩摩藩の厄介…責任は薩摩に」と断言
 - ②幕府 阿部の「越権行為」譴責 その後阿部は外国奉行、北町奉行、白河藩相続(内心は感謝)
☆阿部の毅然とした対応がなければ幕府は更に窮地に追い込まれた
- (4)幕府の対応…統一政権としての権威揺らぐ
 - ①ニールの要求 犯人逮捕と厳重処罰(賠償問題は本国の訓令を待つ)
○公的行動中(勅使護衛)の事件→国政の責任者幕府が薩摩藩に迫れ!
○幕府の回答 「大名領内に幕権及ばず、貴意には添い難し」 統治能力を対外的に自己否定!
 - ②治安対策 居留地廻り(どんどこ廻り) 配備→ニールの要請で東海道に見張番所設置
- (5)賠償金問題の解決
 - ①外相ラッセルの訓令(文久3年1月)
○対幕府 謝罪状 賠償金10万ポンド(40万ドル 30万両 約300億円)
○対薩摩 殺害者の公開処刑 賠償金2万5千ポンド(10万ドル 7万5千両 約75億円)
 - ②幕府の対応 3月以降家茂・慶喜・慶永らは在京
○慶喜 朝廷に攘夷実行を約束(5月10日)・賠償支払い拒否→老中小笠原長行を賠償交渉者に
○支払延期 首脳部不在・攘夷派圧力 ニールらは軍事援助提案(攘夷派抑圧)→内戦恐れ拒否
 - ③英国側の内情(本音は強硬策回避)
○ラッセル外相 キューパー提督に最適な手段実施(船舶拿捕・海上封鎖)
○ニール 居留民保護と対幕衝突は無理→横浜に英艦集結、最後通牒(実際は延期・分割払い承認)
 - ④支払いの経過 交渉開始(2/19 横浜港に軍艦12隻入港)・最後通牒
 - 5.3 最初の支払日 幕府は支払停止を通知→ニール激怒しキューパー提督に解決一任
 - 5.8 キューパー、江戸湾に軍艦2隻派遣→幕府艦の監視 仏公使への調停依頼失敗、慶喜、攘夷責任者として帰着
 - 5.9 幕府、小笠原を横浜に派遣し、賠償金支払い完了(独断?慶喜黙認?)
*賠償金11万ポンド(第2次東禅寺事件1万ポンド付加)支払い(請求から80日で解決)
*「5.10 三港(横浜・函館・長崎)鎖港」の通知
☆小笠原が家康以来の「合議」の伝統を守って決断を先送りにしたら、以後の歴史は全く異なる展開になった可能性があった。(慶喜の対応との違い)
 - 5.25 小笠原、横浜で英船2隻に幕兵1,600人を乗せて大坂に上陸。淀まで進出し家茂奪回を図る。家茂は解放されるが小笠原は罷免

⑤薩摩藩の抵抗

①主張 無勅許条約は無効。非は行列を乱した英国人、殺傷は正当行為、賠償責任は幕府

②経過 6.22 英艦隊7隻横浜出航→7.2 戦闘開始（戦闘の意思なし）→7.4 鹿児島撤退
→11.1 英国公使館で約定成立

*英側死者10数名・負傷者60余名、薩摩側5名・10数名+城内・民家多数焼失

*幕府に和議を薦めるように仕向ける（汽船拿捕の不当性）

*軍艦購入斡旋を条件に2万5千ポンド 幕府から借り（海岸防禦費）250年賦で返済

☆国や立場は違っても、ニール、小松帯刀・大久保利通、阿部正外・小笠原長行に共通したものがあつた。それは何か？ *“noblesse oblige”* <権力・地位ある者の義務>

7. 生麦事件と生麦村

(1)村民の感覚 外国人は見慣れた存在 幕府・薩摩藩・英国人はくよそ者>

①東海道 オランダ・中国・朝鮮・琉球使節が往来 時には茶壺・象までも

②事件への沈黙 必要以上に関わらない「証言」・「報告書」提出後村内で特に話題にせず

☆生麦事件は幕府・薩摩藩にとって重大事 村には役人接待や番所設置の負担増、疎開騒動に関心

(2)事件現場の今 少し離れた民家の前に案内板1基。横浜方面に数百m（キリンビール敷地内）に、
明治16年建立の生麦事件碑 生麦事件参考館は閉館中 **チョット淋しい！**

□おわりに

◎幕末の「異文化」の出会いが引き起こした生麦事件。当事者が対応を誤れば対外戦争や植民地化の危機に発展する可能性のあつた出来事。当時の国際情勢も有利に働いて日本は巧みに危機を乗り越えて明治維新へ向つた。

◎「異文化」とどのように出会うのか…生麦事件には「国際都市横浜」「多文化共生のまち鶴見」のこれからを考える多くのヒントがあつた。

「横浜開港」や「生麦事件」という地域の出来事を、色々な視点から眺めると新しい発見があつた。この報告が、歴史を語り合う愉しさを知る一助になれば幸いです。

【参考資料】

◎「鶴見区史」「生見尾村誌」「埋もれた歴史」（東郷えりか）「横浜ウマ物語」（秋永和彦）

「生麦事件」（吉村昭）「シリーズ日本近現代史① 幕末・維新」（井上勝生）

「ドキュメント生麦事件」（浅海武夫）

◎「生麦事件と横浜の村々」（横浜歴史博物館）

「異文化の出会い 不運重なる悲劇」（朝日新聞 田島知樹）